

『藤原義孝集』の歌風

呉 羽 長

はじめに 対象とする歌について

本稿は『藤原義孝集』収録の義孝歌の歌風の特徴を明らかにしようとするものである。考察の対象とする義孝歌は、九州大学蔵細川文庫本『藤原義孝集』のうち第1〜74番歌（うち五十三首が義孝詠歌。それらのうち29番の一首は連歌形式の歌で、その「贈」にあたる片歌が義孝作である。このテキストを以下細川文庫本と呼ぶ。）のうちの義孝詠歌とする。併せて、義孝歌との関係で右の七十四首のうちの他の作者の歌も検討する。この細川文庫本は、私家集大成『中古1』に「義孝集」として収載されているものである。細川文庫本の第75番歌以降の歌五首、及び漢詩二句一連については、そのうち75〜78番歌（右漢詩二句一連を含む、新編国歌大観では77〜80番歌にあたる）が義孝死後の詠として伝わったものであり、また79〜80番歌（新編国歌大観で81〜82番歌）は「敦忠集」に本来あったもので、第75〜78番歌による和歌説話の内容から義孝歌と類推され付加されたと認められることから、考察対象から除く。更に、右に限定した七十四首に、細川文庫本に収載されていない二類本系統¹⁾の正安本・彰考館甲本の『義孝集』第34・35番歌の二首を加え考察対象とする（新編国歌大観で75・76番歌。この二首が細川文庫本を含めた系統の本文から除かれた理由については、後述する）。以上の七十六首は、新編国歌大観『藤原義孝集』の第1〜76番歌にあたるものである。引用の『義孝集』歌の上に付した番号は、私家集大成本「義孝集」のそれを示す。それが新編国歌大観の歌番号と異なる場合は、それぞれの歌の下に新編国歌大観の歌番号を示す。

一 父伊尹の死―厭世感

天禄三（九七二）年十一月一日、藤原義孝の父、時の摂政伊尹が薨去する。義孝十九歳の時のことである。伊尹の亡くなる前、その病の篤さを嘆く義孝の次のような歌がある。

殿やみたまひしころいかゝと人のとひたるに天禄三年の秋女のかりやるイ
6 ゆふくれのこしけき庭をなかめつゝ このはとともにおつるなみたか
まくれ ふるなみたかな

義孝にとつて父親の病が大きな悲しみであったことが窺える。『義孝集』の多くの歌は、この時以降、天延二（九七四）年九月の彼の逝去までに詠まれたものと推測されるが、伊尹の死に関わる出来事が義孝にとつて詠歌の契機となり、家集に独特の基調を作り出す。

亡父伊尹の四十九日の法会の後、人々がとりどりに伊尹邸を去る姿を見て、残される者の孤独を源惟正に訴える歌と惟正からの返歌が、7、8番歌である。この贈答を含め、家集中に父の死に関わる歌、そこから発する厭世的思念の歌は、十四首数えることができる。父親を失った後も、悲しみが義孝の心を占めている様子は次の歌に読み取ることができる。

春、人のよめといひしに

9 夢ならてゆめなることをなけきつゝ はるのはかなきものをもふかな
おもふには

これは伊尹の薨去の翌春の歌である。「ゆめなること」とは、現実には受け入れがたい、思いがけない父の死をさす。晴れやかな春の様々な現象が「はかなき」ものに感じられ、悲しみに沈んでいる様子が窺える。同様に春の詠として、

11 はるくのはなをあたにとみしものを むかしの人のゆめこゝちする

がある。この歌は、直前の10番歌に付された「はる、かしらけつらせて、みな人くよめといひしに、むめのはなおもしろくあるところを」という詞書がこの歌にも及び、また右詞書には「とのかくれ給てのあくるとしの春御前のこうはひイ」という傍書が付されており、伊尹の死の翌春に庭前の紅梅の花を前に、集まっていた人々に促されて詠んだものと解することができる。「むかしの人」は伊尹をさす。義孝にとつてこれまで「あだ」と見て心惹かれることのなかった春の花であるが、今あらためてその花を見ると、彼は父伊尹の甦りを幻視し、人の

世のはかなさをかみしめざるをえない。また、

とのうせ給ひて、またのとしの春、あめのふるひ

左衛門督殿にたてまつるイ

68はるさめもとしにしたかふよのなかに いまはふるよとおもふかなしな

も同時期の詠で、伊尹薨去の翌年、左衛門督であつた源延光にあてたものである。春雨の降る寂莫のたたずまいに触発されて、伊尹生前の時との隔たりを感じ、取り残された思いを新たにしている。

こうした亡父を悼む思いは、伊尹の死から一年が過ぎ、天禄四年十一月一日の歌にも現れる。法華八講の法会で涙を抑えられぬ義孝に一人の女房がいたわりの歌を詠み置き（63番歌）、それに義孝が返歌してこの贈答が成り立っている。

とのゝ御き日にもゝそのゝ御たうにつこもりの日のよるより念仏せらる ついたちの日のあかつきかたに導師からもいとかなしかりけり

そのほとにあの女房きえずみしてかきつけて女御の御前におきたりける かくなんイ

こゝに給へるかへしとてなみたにももうたあり

殿うせ給て八講したまひしつゐてに

62きみたにもおなしぬれとてのりのあめの

なみたかは

みとりのあめ

れは

かつイ

イ本二のりの雨を本歌にてなみだにもは答也

されは返し

63のりのあめもなみたにわかす神なつき はてやしくれやいとゝなからん

第62番歌詞書傍書の「こゝに給へるかへしとてなみたにももうたあり」及び「イ本二のりの雨を本歌にてなみだにもは答也」から、原態

は第63番「のりのあめも」の歌にある女房がまず義孝に寄せ、それに義孝が62番歌を返したものと考えるべきであろう。これまで疎遠であつたこの女性から忌明けの法会を機に歌を贈られたという内容にして、女性の薄情さを訴える恋歌のような歌ぶりになっている。義孝の悲しみを知る女房との心の交流を示すものである。この62番歌から義孝の悲しみの慰謝を想像することができる。

このような父の死の体験から義孝の中に孤独感を増幅し、厭世思想が深まっていることを窺うことができる。そこには死に傾く心が濃く示されている。

のかれ

なとあるに

あぶきにむめのはなきつけたるところかきつく

20としことにとまらぬはなのいろよりもかれたるのへをみるそかなしき

当該歌詠出の前の時点から、義孝は、たとえば11番歌（前掲）のように現実の仮象の美にかかずらうことに目を向けようとしなない姿を見せるが、父の死を契機に「かれたるのへ（枯れたる野辺）」が示す幽暗でまた荒涼としたイメージの世界に惹かれる姿勢を見せている。

本家集の義孝歌には

かなし 五例（20・27・44・61・68番の各歌）

うし 一例（57番歌）

はかなし 一例（9番歌）

さだめなし 一例（58番歌）

といった形容語が使われ、この世を生きる感慨を吐露する歌が多いことが認められる。

そうした思いが外界の景物に映えあつて、澄明な悲哀を湛える歌が作り出されることがある。

43 ゆくかたもさためなきよにみつはやみ を うふねをさをのさすやいつこそ

44 よをさむみ かはきり たつかはきりもあるものを つくくきぬるちとりかなしな

いし山にまうてくかへる、かはつらにとりおほくたては

61 さよふかくたつかはきりもあるものを 此哥さきにあるに相似たり なくくきぬるちとりとりかなしな

43番歌に先だつ42番歌には、「いしやまのみねのみち」という詞書があり、引き続き43・44番歌も併せて、義孝が近江国石山寺に赴いた折の一連の歌と解することができる。43・44番歌は、石山寺からの帰途で見出した景を詠んだものである。暁方の急な気温の低下により立ちのぼる河霧の中に千鳥が降り立ち、じつと浅い川面に浮かびまた佇立する。その姿に、去りゆくものばかりのこの世にとどまり生きる自らの運命的な姿を義孝は見出している。ここには彼の内なる出離の思いを読み取ることもできよう。

44番歌は61番とその第二・三・五句が重なる点から、もともと同じ歌であったものと推測される。両歌は初句が異なることで重複して載せ

られたものであろう。61番歌は「たつ」と「きぬる」の対照を詠み込んで、現実世界に留まるものに對する愛しさの感慨を催している。その前提には、義孝の心において父の死に触発された出離への思いと、それがかなわず現世にとどまる寂寥があつたものと思われる。その寂寥が、「なく／＼きぬる」で、あえて現実世界に戻つて来ている千鳥の姿と共鳴する。哀調の鳴き声を上げつつ水辺に群をなして佇む千鳥の姿は、悲しみを抱いて現世に佇む義孝自らの心象を写し出すものであつたろう。

五月五日、ほと／＼きすのこゑせすとて

58こよひしもきかてや／＼まむほと／＼きす のちになくともさためなきよを

右の歌はほととぎすの鳴くべき五月五日にその鳴き声がないといつて詠んだ歌である、ここで「のちになくともさためなきよを」という訴えは、伊尹薨去後の、世を無常と見る姿勢が反映されており、義孝が短命で世を去つたことを考え合わせるとき、「死の予感」を感じさせ、哀切を加える。

二 宮廷社交の歌・恋の歌

一方で、藤原義孝は宮中や堀川中宮（藤原兼通女・融帝后・媼子御所）などを舞台に宮廷女性と歌の贈答を行っている。本家集の中の約半数がそれら宮廷女性との交流の歌や恋人との贈答の歌といえる。それらの歌の中で義孝は相手の女性に積極的に交際を求め、相手の薄情を嘆く。

義孝の宮廷女性との交際を示す歌の中で、堀川中宮の左衛門ないし（内侍）という女性とのそれは特に多くを占める（18・19・23・45・46・47・48番歌）。瓜を二人の間のキーワードとしてやりとりが行われる（23・47・48番歌）。義孝の好尚にかなう知性と対応の力を備えた女性であつたと推測されるころである。

またおなしところにてちよりたるにまらうとのありしかはたちなからかへりてまたあしたにうりにかきつく

いまかへりなんしはしといひいたしたりけるかとみにかへらざりしかは

47 これをみよひとよはひとめつらかりき たちわつらひしうりにやはあらぬ
はこれ ひとめよ はかられて あるらん

返し

48 たちわひてはひかへりけるうりかつら ならしかほにや人のみてけむ

左衛門内侍との贈答を含めて、義孝が女性に恋情を訴え、相手はその歌に実意のなさなどを読みとつて切り返し義孝の恋慕を逃れようとする、というパターンをもつて贈答がなされるが、そうした中で義孝の働きかけには人なつこい遊び心が見えることがある。例えば、前に触れた瓜を小道具としたやりとりとしては、

左衛門藏人のなをうとかりければこくれうのをかしきをつゝみてそれにかきつく
うりにかきてイ

23 ならされぬかはそのくれときゝなからよひあか月とたつそくるしき
み うり しりイ つゆけき

という歌による働きかけを挙げることができる。また、彼は31番歌で「かはらけ」に歌を書いて紙に包み、中の「かはらけ」を砕いて相手の女性に送り、パズルのようにはり合わせることで歌が読みとれるようにして、そこに書かれた歌の返しを求めるといふ戯れも行っている。

またかはらけにかきて、かみにつゝみて、うちわりて、とらせたれば

31 ためなくかせのふくよははなすゝき よらむかたなきものをこそおもへ

また返し

32 あはれにもおもふなるかなはなすゝき 秋こそうければるもしらしな

更に、33く37番の一連の贈答の中で、義孝は一品宮（村上天皇女九宮資子内親王）の大はんところ（台盤所）でもらった餌袋に晩春の花々をいろいろしごき入れて梅壺の殿中に入れ、歌を添えている。

一品宮の大はんところにて、かむしねかひしかは、やまふきのはなにいとをかしうならして、えふくろにさしいたりければ、
のまへ をく

こしにひきつけて、むめつほのかたにきむたちひきつれていきて、はなをいろ／＼にこぎいれて、かうかきてなかにいれたりける
しか

33 うれしやはこれをみつれとあちきなく はなになりたるこゝろのみして

34 また返し

いつとなくのとききはるのそらなれば
はなにおとらぬ身ともなりなん

35 またなさはまことのはなにおとらめと あやしやはるのときならぬみよ

また返し

36 ときならぬ身にもいかてかなりぬらん はるにおくるゝはなもありやは

またかへし まるなるさうふにつけてイ

37 春ははなちゝやちくさにおもへとも ことのはしけしかくてやみなん

りくイ
にほ

右台盤所の女房から実の成らないはずの山吹の花に柑子をつけ初夏の趣向を見せた餌袋を受け、義孝はその袋に梅壺（円融天皇女御詮子の住む殿舎）へと歩む途中に咲く花々をしごき入れて梅壺の女性に贈る。こうして始まる贈答歌群であるが、33番歌を義孝歌、34・35番を相手の女性の歌、36・37番を義孝歌と解することができる。「はなをいろく／＼にこぎいれ」という義孝の遊び心で歌の贈答が始まり、35番歌で義孝から贈られた「ときならぬ」花のありように素直な驚きを示した相手に対し、彼は自らの独言のような36番歌の後、37番歌で歌の応酬を閉じている。36番歌の「時ならぬ実」「春に遅るる花」には、時の流れに置き去られようとする意識が読みとれる。そこには伊尹の死を契機とする死への傾斜が作用していたものと推測される。

なお、相手との歌の贈答における切り返しの妙という点では、実際の恋の歌ではないが、第1く3番歌が注目される。これらは義孝が源惟正の家に方違えに行つて泊まつた際の、義孝の惟正への贈歌（1番歌）と惟正の答歌（2番歌）、そして義孝の1番歌に対し義孝と親しいある女性が「かくはいかゝ」と言い惟正と同様の立場にあることを仮想しつつ2番歌とは別趣向で詠んだもの（3番歌）である。

源修理のかみのいへに、かたゝかへにいきてあるにまくらいたしたるつゝみかみに

これたゝ

1 拾つらからば人にかたらむしきたへの まくらかはしてひとよねにきと

返し

2 あちきなやたひのやとりをくさまくら かりならずとてきためたりとか

あかすおほえしかは、人に、かくなんありし、これか返事せよといひしかは、かくはいかゝとて

3 かたるともたかなはたゝしななゝらぬ こゝろのほとや人にしられん

1 番歌の頭に付された「拾」は『拾遺和歌集』収載歌（一一九〇番）であることを示す。右のうち2番歌は、仮の泊りという点で義孝の趣向をそらし、3番歌は別様に義孝歌に情愛の浅さを読みとるところに返歌の妙を見せる。これらは義孝の詠んだ1番歌の卓越さを示すものではなく、その義孝歌に対する相手のそれぞれの趣向の妙が見るべきものとして受け止められ、集の冒頭に置かれたものと考えられる。

右に見たように、宮廷社交の歌は、相手への恋情の訴えという形で詠みかけられ応酬がなされるが、一方その恋情が単なる社交の域を越えて真率なる姿で表現される場合がある。そのような恋歌の中には義孝の繊細で純粹な心情が示され、その情熱のみずみずしさが彼の歌の特質を作り出している。

人のもとよりかへりてつとめて

12 ^{後拾} ^か ^か きみためをしからさりしいのちさへ ^{ひぬ} なかくもかなとおもほゆるかな

念願の恋のなつたとき、この女性との新たな逢瀬の願いが生への未練としてわき上がるという心理の微妙な変化を詠うものである。この歌は『百人一首』に第五句「おもひけるかな」として収載されており、有吉保氏はこの歌の特質について、「一首にこれといった技巧を用いることもなく、なだらかな調べの中に恋を成就することによって意識された心の変化を素直に詠んだ作であるが、純粹な感情やいちずの情熱を相手の女性に訴える作になっているといえよう。」⁴と指摘される。「すなおなやさしいひびき」、『百人一首』の中ではきわだつて直情的な恋の歌。⁵、「しらべも美しく切実な情趣があつて、いい歌である」⁷という評価は、有吉氏と同趣意の指摘であるといえる。恋人への高らかな呼びかけに若者の純粹さが読み取れ、類歌には見えない義孝歌の特徴を示している。

12 番歌のような純粹で一途な恋の情趣を詠んだ歌としては次のようなものもある。

おなし人にひさしくたえて

19 ^{れぬを} わするれとかくわするれとわすられす ^{れぬを} いかさまにしていかさまにせん

女のもとに

52いのちたにはかなくもあらはよに
あらはとおもふきみにやはあらぬ
おもひつきにしことはわすれし

19番歌は、身の内の恋の情熱を理性で処理できないような心の状態をそのまま吐露した歌であり、52番歌は、相手の女性と逢うために命だけでもあつてほしいと願う気持ちを詠むもので、ともに恋の直情性の純な現れと捉えられる。

このような恋情の特徴は、細川文庫本にはなく、二類本系統の正安本・彰考館甲本にのみみられる贈答歌を見ることで更に確かめられるものである。この二首は一類本で69く74番歌とともに、伝写のある段階で欠脱した歌であつたが、二類本と比較しても補われず、一類本に収められないままであつたものである。詞書の「まさもと（ひらともイ）の少将」については、「まさもと」と訓むことのできる名前の人物で、天禄三（九七二）年頃から天延二（九七四）年までの中で近衛少将であつた者は、記録にみえない。傍書に示される「まさひら」も同様である。なお『近衛府補任』（統群書類従完成会）によれば、藤原理兼が天禄三年十一月より天延四年正月まで義孝と同じ右少将の職にあつた。この人物をさすか。

山おろしのかせはふけともことはも今はちりこぬ谷の埋木（正安本『義孝集』34番歌、新編国歌大観「義孝集」75番歌）

「山おろしの風が吹く」とは「よきりこむ」という言づてのことである。この歌で義孝は、約束の時に訪れることのない、加えてその断りの消息もない同僚に対し、大げさに、肩透かしされたやるせなさを「ことのはも今はちりこぬ」といつている。これは、自らを「谷の埋木」に擬し、男に顧みられない女性の悲しい境遇を詠む恋歌のような形で、「まさもと」にその不実を訴えるものである。「まさもと」はそれを次の歌で大仰なものとして非難する。

おりいかにみねの松とはいはずしておもはせたりな谷の埋木（正安本『義孝集』35番歌、新編国歌大観「義孝集」76番歌）

「まさもと」は、「みねの松」（あえなかつたのでお待ちする、の意）といえはことが済むところ、「谷の埋木」と義孝が自分を捉えて恋歌のような歌を送つてよこしたことを難ずる。それは義孝の、一つの事柄を大げさに誇張して自らの感慨を切実に相手に訴える詠いぶりの特徴の指摘でもあつた。こうした大仰ともいえる感受性の吐露を含めた義孝詠歌の方法が『義孝集』のそれぞれの歌に及ぶものであつたといえる。

見てきたように、義孝は宮廷女性との交流などの中で歌による働きかけに人なつこきを示し、エスプリのこもった贈答を重ねているが、そうした中に、前に36・37番歌で見たように、彼の厭世的心情が読みとれることも無視できない。そうした心情は次の歌にも認めることができる。

また女にイ

53 いつまでのいのちもしらぬよのなかに 　つらきなけきのたゝならぬかな
新古 やますもある

はかなく短い命を自覚する自分に相手の女性が冷淡であることを嘆く内容で、その思いを相手に訴えるものになっている。義孝の無常を観ずることに発する厭世感がおのずと恋慕の情の訴えかけとして現れたものであろう。なお、この歌に対する女の「かへし」が

54 みを つみて なかゝらぬよをしる人は 　ひとへに人をうらみさらなん

とある。義孝歌の中の矛盾をつくことで、彼の恋情の矛先をはぐらかそうとする趣向の歌である。

右に見た義孝恋歌に窺える厭世的心情は、やはり父伊尹との死別が契機になっているものである。そして一方で12・19・52番歌などに見るような恋情の表現の真率さ、若々しく純粹な情熱の吐露が義孝歌の特徴といえる。厭世的心情はそうした恋の歌にも力を及ぼすところがあつたと推測できる。後世ごせの幸いを憧憬しつつ現実世界に生きる義孝に、なお捨てがたいものとして恋はあつた。そしてそうした心情を哀切なものとして描き出していくのに、胸底の厭世観の作用は見過ごせないものと考ええる。

三 改稿による歌風の変化

細川文庫本では義孝の歌の相手（特に男性）として登場する人物の官職名が、傍書に示されたものと本行本文のそれとで異なることがある。傍書の記事と本行本文は、もともとそれぞれが本家集の一本であつたものであり、撰出時期を異にするものと認められる。その選出時期に当該人物が就いていた官職名が記されたゆえの違いと考えることができる。つまりそれぞれの『義孝集』の本文の撰出時期が各人物の官職名によつて明らかにすることができるのである。まず傍書では義孝生前、各歌の詠作時の官職名がそのまま記されていることから、生

前の義孝が家集編纂の意図によってまとめたもの（もしくははその意図のもとで歌を集めて綴じるなりしたもの）と考えられ、一方本行本文部分はそこに示される官職名から天延四（九七六）年四月から六月の撰と見なされ、義孝以外の人物がその時点での官職名の整理を行ったと判断できる。そして傍書に示されたものと本行本文には内容的に変化が認められる。¹⁰ ただしそうした歌の内容の変化に上述「義孝以外の人物」が関与したかははっきりしない。以上の点の確認の上、右改撰による歌風の変化についてにみていく。

まず12番「きみ（か）ため」の歌（前出）では、下句「なかくもかなとおもほゆるかな」の「ほゆ」の箇所「ひぬ」と傍書がなされている。その記述によると、当初「おもひぬるかな」の本文があったことがわかる。その内容は、我が命の長くあれという願いが相手の女性との逢瀬の後のいつときの感慨としてわき上がったものであることを示す。それが本行の「おもほゆるかな」に変ることで、前節で述べたような心のありようになり、右の願いが今も持続し「ずっと思っている」ことを表わすことになった。恋情の持続を表現することで、より普遍性を持った愛の歌となり得たといえよう。

19番「わするれと」の歌（前出）は、初句の「るれと」の箇所に「れぬを」という傍書が付され、初期形は「わすれぬを」とあったことがわかる。傍書が示す「わすれぬを」は、忘れられない思いを述べるにとどまるのに対し、本行本文では「わするれど」と改められることで、「この恋の苦しみを忘れようとするのだけれど」となり、更に「わするれど」を重ねることで一層恋に苦しむ姿が際だたられ情熱的になる。また52番歌（前出）は、下句「あらはとおもふきみにやはあらぬ」の傍らに「おもひつきにしことはわすれし」という言葉が記される。傍書による本文「おもひつきにしことはわすれし」だと、「わすれし」の「し」を打消の意志（じ）と解し「命ある限り私はあなたに想いを懸けたことは忘れません」という意になるが、それが本行本文のように「あらはとおもふきみにやはあらぬ」となると、相手の女性と逢うために「命だけでも長くあれ」と願う気持ちを詠むことになり、反語による語気と相まって、一層恋の切実さを強める歌になる。

更に、53番「いつまての」の歌（前出）については、第五句「たゝならぬかな」に「やますもあるかな」と傍書されている。これによる本文では、「いつまてのいのちもしらぬ」と「つらきなきのやますもあるかな」が対比的になり、はかなく短いそんな命の自分に嘆きだけは止むことなく長く続くと嘆ずる表現の工夫が見られる。この本文を『新古今和歌集』は採っており（巻第十二恋二、一一一三番、峯村文人氏は「はかない命を自覚しながらも、恋人の冷淡さを嘆き続ける自分を訴えずにいられたのであったのである。真情の端的な表白に哀切な

響きがある¹⁾」という解説をされる。このような、はかない命の自分であることで無常の世を一人嘆く述懐の傾向のある内容（求心性のある表現によりその悲しみへの同化を相手に求めるもの）から、本行本文のように改変されることになると、「あなたを思う恋の嘆きは並々のものでありません」という直線的な意味合いとなりつつ、相手へ訴えかける力を強めてもいる。

このように見てくるとき、詠作時の個別的・一時的感慨の吐露というあり方（12番歌など）から一般化・主情化の方向に改変が行われていることを確認することができる。こうした操作は義孝固有の詠出の方法とも言い得、改変には彼本人の力が与っていたと考えたい。そしてこのような改変によって義孝独自の歌風が成熟することになったのであろう。

結語

以上、『藤原義孝集』における義孝詠歌について、父伊尹の死に発する厭世観の現れ、そして恋を題材とする義孝歌の特質について検討し、傍書と本行本文における官職名の違いから家集における詠歌の内容的展開を確認した。義孝は厭世的心情を胸底にもちつつ現実世界に愛着する。宮廷生活での詠歌に見られる遊び心はそうした愛着の表れでもあったろう。彼は現実世界を生きる中で澄明な歌を詠み、また恋の体験の中で純で哀切な歌の世界を作り出す。厭世的心情は恋情に寂しさと悲しみの深さを加え、その二つの心情の関係が義孝歌を特徴づけるものであったといえる。

義孝は、天延二年九月十六日、二十一歳でその生涯を閉じる。その夭折は彼の歌の清らかな抒情と響きあい、その生涯をさわやかな哀愁を湛えるものになっている。

注

1 田坂憲二・順子氏編著『藤原義孝集 本文・索引と研究』（昭和六二・二二、和泉書院）所収「研究篇」（田坂憲二氏担当）「義孝集本文考（一）」細川

- 文庫本系諸本の再検討―及び「義孝集本文考(二三)―一類本・二類本の関係について―」の分類による。
- 2 第6・7・8番歌のほか、9・10・11・43・44・49・50・62・63・68番の各歌が該当する。
 - 3 第23番歌は詞書中に「左衛門藏人云々」とあり、左衛門内侍と同一人物と考える。46番歌は前の45番歌の左衛門内侍への歌に続いての「ほりかはの中宮の内侍」とあり、また47番歌は「またおなしところ」とあるので、左衛門内侍のことと判断した。48番歌は47番の返歌。
 - 4 有吉保氏『百人一首全訳注』(昭和五八・一一、講談社学術文庫)。
 - 5 島津忠夫氏『百人一首』(昭和四四・一二、角川文庫)。
 - 6 大岡信氏『百人一首』(昭和五五・一一、講談社文庫)。
 - 7 田辺聖子氏『田辺聖子の小倉百人一首』(昭和六一・一〇、角川書店)。
 - 8 田坂憲二氏(1)に掲げた論文のうち、「義孝集本文考(二三)―一類本・二類本の関係について―」。
 - 9 藤原理兼は、父が朝忠で、『尊卑分脈』に「正四下 大皇太后宮権亮 母出羽守忠舒女」とある。
 - 10 拙稿『藤原義孝集』の成立と伝流』(『北陸古典研究』第四号、平成元・九)。
 - 11 小学館新編日本古典文学全集版『新古今和歌集』頭注。